社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 広報誌

# 季刊 ひたすらなるつながり

vol.7
2022年3月

## すべての子ども・若者たちが希望を持てる社会に向けて

コラム〈01〉福祉論壇
居場所の政策化
社会活動家／東京大学特任教授 湯浅 誠 さん

特集〈02–08〉
可能性をはぐくむ 縁架け橋
希望を持てる社会に向けて
～若者たちの本音を聞く座談～
野口 竜也 さん、廣田 悠介 さん、清﨑 鈴乃 さん、河西 優 さん、コーディネーター 中島 円実さん、小坂 綾子さん

連載〈09–11〉縁共生の場探訪
あったかほーむ（社福）あすなろ福祉会

コラム〈12〉霞が関レポート
厚生労働省 社会・援護局 福祉基盤課
福祉人材確保対策室 室長 田中 義高 さん

連載〈13–14〉生きづらさを生きる
困難を抱える母子家庭の自立を支える社会への架け橋
多機能型シェアハウス『のぞみ♡ハウス』

寄稿〈15–16〉えにし雑感
野洲市 野川 篤美 さん、甲賀市 山之内 洋 さん、草津市 佐藤 すみれ さん、湖南市 谷 智之 さん

コラム〈17〉おすすめの映画と本
最強のふたり／生きるぼくら 他1作

お知らせ〈18〉滋賀県社協レポート
滋賀県福祉用具センター

社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 広報誌
季刊 ひたすらなるつながり
2022年3月9日発行
通巻7号
発行人 渡邉 光春
〒525-0072 草津市笠山七丁目 8-138
社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会
定価 500円（税込）

特集

# 可能性をはぐくむ enishi-kakehashi 縁架け橋

## 子ども若者ケアラー（ヤングケアラー） × ケアリーバー（社会的養護経験者）

社会的養護のもとで暮らす子どもたちに向けて、滋賀の縁創造実践センターでは児童養護施設や里親、中小企業家とともに、平成27年度から「ハローわくわく仕事体験」等の取り組みを行ってきました。そして、彼らが社会的養護を離れたあともサポートを受けられるよう、滋賀県社会福祉協議会を含めた福祉や就労などに関する施設・団体により「滋賀県地域養護推進協議会」が令和3年3月に設立されました。これは、社会的養護を経験した若者をはじめ、生きづらさを抱えている若者に対し、さまざまな関係者が協働して生活支援、就労支援、居場所づくり、見守り等を行う新たな枠組みです。

また、今年度、滋賀県内すべての学校や相談支援機関等を対象に、「子ども若者ケアラー（ヤングケアラー）」の実態調査を行いました。これは、早期把握や支援のあり方を検討することを目的として実施したもので、回答のあった小・中・高校331校のうち、49.8％の学校が子ども若者ケアラーが「いる」と回答しました。また、各校で把握している該当児童生徒は合計590人が挙げられました。

こうした生きづらさを抱えた若者たちと社会とを結ぶ「可能性をはぐくむ縁架け橋」が必要です。

### 子ども若者ケアラー（ヤングケアラー）

本来、大人が担うと想定されているような家事や家族の世話などを日常的に行っている子どもや若者のこと。令和３年３月に厚生労働省が取りまとめたヤングケアラーの実態に関する調査結果により、この問題が顕在化しました。滋賀県では20歳代の若者までを含めて「子ども若者ケアラー」と呼んでいます。

### ケアリーバー（careleaver／社会的養護経験者）

直訳すると「ケアを離れた人」。さまざまな事情で児童養護施設等で育った社会的養護の経験者のことをいいます。社会的養護とは、保護者がいない、または育てられない18歳未満の子どもを、親や家庭に代わって、児童養護施設や里親・ファミリーホームなどで社会として養育の責任を果たす仕組みです。滋賀県内では約300人の子どもたちが社会的養護のもとで暮らしています。

社会活動家／
東京大学特任教授
湯浅 誠さん

ふくし
# 福祉論壇
ろんだん

## 居場所の政策化

居場所は、既存のコミュニティの窮屈さから逃れるために作られてきた経緯があり、規格化された行政サービスとは相性が悪かった。学校になじまないアンチ学校の子どもたちがたまる場、それが居場所に対するありがちなイメージではなかったかと思う。

しかし、行政サービスの限界が明らかになり、多様性が称揚され、という流れの中で、居場所も「昇格」してきて、今や、地域共生社会、教育、孤独孤立対策、こども施策等の政策文書でも居場所が語られるようになってきた。居場所の政策化が進み始めている。
さて、これは「良いこと」だろうか。

居場所は民間主導で広がってきたので、公式の定義はなく、自分たちが居場所と言えば、そこは居場所だった。結果として雑多な場が同じ「居場所」という言葉の下で展開されている。政策化は、多くの場合、その雑多なものの整理を伴う。雑多なままでは、いったい何に税金を投入するのか、納税者に説明できないからだ。そして整理は規格化を伴う。ぐにゃっとした粘土をきれいなサイコロ状に整形すること、定型化することだ。

定型化された居場所の運営は、今よりは安定するだろう。自分で資金を集めなくても、規格にのっとった運営をしていれば税金が投入される。安いという不満は消えないだろうが、無償ボランティアがあたりまえ、という世界ではなくなるだろう。

自分たちの活動が認められたという感覚も持てるだろう。なんと言っても公的活動だ。自治会や学校やその他もろもろの人たちの見る目が変わるだろう。地域のおじいちゃんおばあちゃんが「ちゃんとしたこと」と受け止めてくれるだろう。

他方で自由度は失われるだろう。いや、実は失いはしない。規格からはみ出る部分は自前でやればよいだけだ。しかし、多くの場合、やらなくなる。自由度は、だから、「手放す」が正しい表現かもしれない。
さて、これは「良いこと」だろうか。

良いことも悪いことも両面あり、だからいかなる政策化をするか、その中身こそが重要で、その交渉力が「業界団体」の腕の見せ所だ、と言われる。居場所の業界団体とはどこだろう。業界団体が線引きを持ち込むことはないのだろうか。
かつてはどうだったのだろう。障害者作業所、宅老所、子育てひろば…民間活動の政策化は各種の分野で繰り返されている。あれは良かった、良くなかった…評価も両方を聞く。その経験を居場所の政策化に生かすことはできないだろうか。ぜひ聞いてみたい。
さて、それは「良いこと」でしたか、と。

# 希望を持てる社会に向けて
## ～若者たちの本音を聞く座談～

どんな環境で育ってきたとしても、将来に希望を持って生きていける社会、子どもや若者の可能性をはぐくむことのできる社会をめざして、子ども若者ケアラーとケアリーバーの若者たちの生の声を聞き、私たちに何ができるのかを、みなさんと一緒に考えたいと思います。

2022.02.06.sun @草津市立市民交流プラザ

《本音を話してくれた若者たち》

**清﨑 鈴乃** さん

20代。知的障害のある弟のケアを行ってきた。病気や障害のある兄弟姉妹が語り合う「かるがも～学生きょうだい児の会～」を発足させる。映画鑑賞やスポーツ、コーヒーを淹れることが好き。

**野口 竜也** さん

20代。中学生の頃から児童福祉入所施設で暮らす。退所後は、運送業で働いている。長所は、ひとつのことに集中して取り組むこと。

**河西 優** さん

統合失調症の母のケアを行ってきた。現在、大学院で「子ども若者ケアラー」の研究を行っている。好きな食べ物は、鶏肉（特にやきとり）、枝豆、玉子雑炊。

**廣田 悠介** さん

20代。中学生の頃から児童福祉入所施設で暮らす。退所後は、製造業で働いている。カードゲームが好き。ケーキが苦手。

《コーディネーター》

**小坂 綾子** さん

京都新聞を退職後、フリーライターとして活動。記者時代から困難を抱えた子どもや教育・福祉等、幅広く取材をしている。本誌の編集にもかかわっている。

**中島 円実** さん

滋賀県地域養護推進協議会事務局長。スクールソーシャルワーカー。長年、大津市で子ども家庭支援に携わる。



## これまでに出会った印象的な出会いや言葉

『小坂』 今回「可能性をはぐくむ縁架け橋」がテーマということで、みなさんの生の声を聞かせてもらいながら、**子どもや若者が希望を持って生きていける社会**にするために、地域で何ができるのかということを、一緒に考えていく機会にしたいと思っています。

『中島』 そういう地域を考えていく上で、みなさんがこれまでに誰かや何かとの出会いの中で、自分がちょっと良い方向に変わったという経験があれば、聞かせてもらえますか。

『廣田』 僕の場合は、高校1年生の時の担任からの**「がんばらなくていい」**という言葉ですね。当時は今と性格も違って内気だったんですけど、先生の薦めで生徒会に入ることになった時のアドバイスとして、「ずっとがんばっていると、どこかで失敗したときに一気に落ちてしまうから、ここというときだけは真剣にやれ。あとはがんばらなくていい」と言われて。それまで無意識にアクセルを踏み続けていた感じがあったんですけど、自分でアクセルとブレーキを決めて、息抜きをするタイミングを見つけられるようになったと思います。

『清﨑』 私も常にアクセル全開ですね。廣田さんの話で、高校の時の部活のコーチに**「常に70％でいい」**と言われたのを思い出しました。自分は後回しにして人のことに全力で、後からしんどくなることが多かったので。

自分の中で、高校の時が一番救われたという感覚があります。中学までは〝知的障害の弟を支えているお姉ちゃん〟など家族のことが常に枕詞についていたんですけど、高校では**私という存在のいろんな面を認めてくれて**、とても居心地がよかったです。

『野口』 僕も考えてみたんですけど、今の時点であんまり自分の中に残っている言葉とか出会いはなくて…。きっとまだ見つかっていないだけで、これから出会うのかなと思います。

でも、ターニングポイントはありますね。中学2年生の頃、不登校気味だったんですけど、なぜか「このままじゃやばい」ってふと思って。それで妹が先に施設で生活をしていたので、僕も行くことにしたんです。その施設で生活するために転校した先の学校が少人数だったので、そこから行けるようになりました。**勉強しに行くというよりは、みんなと話しに行く感じ**で。その時の仲間とは今でも仲が良いです。

『河西』 私は、母が統合失調症を発症した時に、叔母から紹介されたカウンセラーとの出会いが印象に残っています。その時は母から外出を制限されていて通えなかったのですが、落ち着いてから通うようになりました。もう長い付き合いなので、すべてを話さなくてもわかってくれて、**家族よりも私自身を1人の人間として後押ししてくれる**というか、信頼できる存在です。

最近では、パートナーに言われた**「自分を幸せにできるのは自分しかいない」**という言葉も印象に残っています。何かを選択する時にはどうしても家族に引っ張られてしまうんですが、その言葉が後押しになって、自分のやりたいことや思いを再確認できました。

『清﨑』 印象に残っている出会いとかって、聞かれる時によって違うんじゃないかな。10年後に同じことを聞かれても同じように答えるのかなって、みなさんの話を聞きながら考えていました。

## 5年後、10年後…これからやってみたいこと

『野口』 もともとの夢がケーキ屋さんになることで、自分の店を持つお金を稼ぐために運送業につきました。配送の合間にカフェに寄って研究するぞ！と思っていたんですけど、実際にはやらなくて…。仕事中、1人で運転している時間が長いのもあって、ずっと自問自答していたら、「ケーキ屋は本当にやりたいことじゃなかったんや」って気づいたんですよ。だから、早く本当に自分のやりた

野口さん

いことを見つけて突き進みたいです。

『河西』 私はひとり暮らしを始めてから、家族と距離を取れるようになってきて、自分の選択とか自由とか、**自分の領域を大事にしたい**なと思っています。離れていると家族のことが気になることもあるんですけど、私の家のことを知った上で関わってくれる友達もできて、少しずつ家族のことが頭から離れている時間が増えてきました。まだ波はあるけど、カウンセラーさんにも支えられながら、うまくいき始めているなと感じています。

『清崎』 **弟がいなかったら会えなかった人やできなかった経験**があるので、それは自分の強みだと思っています。だから、弟に何かを返していきたい。障害のある人はできないことも多いけれど、できる方法を一緒に考えてどんどんやりたいと思っています。

また、母子家庭ということもあり、この先母親の介護とか親亡き後の弟のこととか、長女の自分がやるべきだと思っていて。自由にできる時間が実はもうあまりないっていうのが頭の片隅にあるので、できるうちは何でもやっておこうと思っています。個人的には富士山に登ってみたいです。

『廣田』 僕は、**やりたいことという風には決めていない**です。やりたいと思ったときにやらないと、一生やらないので。強いて言うなら、安定した生活。今でちょうどいいんですけど、プライベートな時間を大事にしたいので、好きなことができる時間とお金は確保したい。カードゲームが好きなんですけど、1人ではできないものなので、僕は他人と交流するためのツールとしても使っています。対戦をきっかけに結構仲良くなれたりして、楽しいんですよ。

## それぞれの力を発揮するための関わり

『小坂』 いろんな出会いや言葉で、気持ちが楽になったり、一歩踏み出せたりしたお話を聞かせてもらったんですけど、地域の中でどんな関わりがあれば、みんなが自分の力を発揮できるようになると思いますか？

『野口』 そもそも自分の力って何かわかっていないので、それを知るためのものとか。体験学習みたいにいろんなことをやってみて、**自分にはどんな能力があるか知る機会**があったらいいなと思います。

『小坂』 たしかに自分の力っていろいろやってみる中でわかるものですもんね。

廣田さん

『中島』 自分では向いていないなと思っていても、なんだかんだ続けているうちに力になることもありますしね。

『廣田』 僕は昔、虐待を受けていて、それで施設に入ったんですけど、高校で生徒会に入ってからは人前で話す機会が増えたり、学校外でも自分の経験を話す機会をもらったりする中で、前に出て発言する力がついてきたかなと。虐待のことをもっと正しく知ってもらうためにも、**発信できる公の場**があれば、自分ならできるかなと思います。

『清崎』 私も当事者の声を聞いてほしいという気持ちはあるんですけど、発信できる場が少ない。「ヤングケアラー」のように**ひとまとめにせず、「ヤングケアラーの清崎鈴乃の声」**っていう風に聞いてくれる人や、発信する場があればいいなと思います。

もう一つは、良い意味で**おせっかいな人が増えてほしい**なといつも思っていて。すれ違った時に「おはよう。最近どうや？」って声をかけてくれるだけでも、自分の存在を社会が見てくれているような感覚になるので、小さくてもそれぞれのできることでお互いに支えあえる社会になったらいいですね。

清崎さん

『小坂』 カテゴリーに当てはめると、わかりやすくて理解したような気になってしまいますが、その奥には一人ひとりの生活がありますよね。

『清崎』 その人を知るためのツールとして「ヤングケアラー」など、カテゴリーにわける言葉があるのかなって思っています。一人ひとりの考え方って多様なので、その多様性もあわせて知ってほしいです。

『河西』 私も**カテゴリーでくくらないでほしい**なとは思います。その人を理解するきっかけとしてはいいんですけど、カテゴリーに当てはめてわかった気になることで、何かしてあげる対象だと思ってしまうこともあるんじゃないかな。いろんなしんどい経験があっても、それがその人のすべてじゃないし、自分も誰かの力になれることもあるかもしれない。**一方的に支援される対象になるのは、いやだな**って思います。

小坂さん　中島さん

『中島』 そういうものが不要だとは思わないけれど、カテゴリーがあることで、その人自身を見られなくなるんですかね。

『河西』 これまでに、私の家のこととかを知った上で、それに対しての率直な感想を言ってくれた人がいたんですよ。腫物（はれもの）を扱うみたいではなく、問題に触れた上で、「そういうしんどい面もあるけど、あなたはあなたじゃないの？」って、いろんな側面を持った1人の人間としてそれまでと変わりなく接してくれて、それは私の中でとても腑に落ちる関わりでした。

『小坂』 知らない世界の人だと思うと「聞いてもいいのかな」と迷ってしまうかもしれないけれど、カテゴリーではなくその人自身のことを知りたいと思ってインタビューすると話がはずむこともあります。1人の人として**相手のことを「知りたい」と思う気持ちが大事**なのかもしれないですね。

『河西』 自分のプライベートをさらけ出すのって勇気がいりますが、人前で話したり、整理したりする力がだんだんとついてきたので、話す機会があるといいなとは思います。

『中島』 世の中は知らないことだらけですけど、「知らない」ということを知った上で、相手のことを知りたいっていう雰囲気が地域の中であったらいいのかな。聞いたらだめっていうイメージとか、心の垣根みたいなものが、どうしたら外れるのかなと考えさせられました。

河西さん

『小坂』やりながら、失敗しながらでないとわからなくて、その都度反省しながらやっていくしかないのかもしれません。

『中島』私たちも含めて、みんな何かの当事者なので、**トライ&エラーを恐れずに垣根を外して知り合える**地域にしていきたいですね。

## 今日、参加してみてどうでしたか？

『野口』今回、あんまりたくさんは話せなかったんですけど、自分が参加したことが、ちょっとでも何かの役に立てていたらいいなと思います。

『廣田』僕は施設に入っていて、ほとんど家族と過ごしていないので、子ども若者ケアラーのお2人の話から、そういう人生もあったんやなと、自分の人生と比較しながら話を聞かせてもらっていました。

『清﨑』共通しているところもあれば違うところもあって、**みんな何かの当事者**で、いろんなことを感じて、経験してきて…。今日はこうやってお話できたのはすごく良い機会をいただいたなと思っていますし、せっかくのご縁だと思うので、これから一緒に何かできることがあったらいいなと思います。

『河西』これまでケアの話を求められることが多くて、今日も子ども若者ケアラーの当事者として、家族のことを話さないといけないのかなと思いながら、ここに来ました。でも、趣味のこととかも含めていろんな話ができて、そういう経験って本当にないので、いつもとちょっと違う空気感でおもしろかったです。

## 座談会を終えて・・・

社会的養護で暮らす子どもたちは、児童福祉法によりおおよそ18～20歳になると「自立」を求められ、児童養護施設などから卒業することになります。その多くが、ひとりで生計をたてていかなければなりませんが、安心して頼れる家族がないことも多く、普段の生活で起こるさまざまな困りごとをひとりで抱え込み、疲弊してしまうことも少なくありません。しかし、ひとりで抱えきれないことがあっても、周りに相談できたり、声をかけてくれる誰かがいたりすれば、乗り越えられることもたくさんあります。

一方、ヤングケアラー（子ども若者ケアラー）については、令和３年３月の厚生労働省の実態調査をきっかけに報道等で取り上げられることも増え、ようやく存在が認知され始めました。
滋賀県社協が県の委託で令和３年度に実施した子ども若者ケアラー実態調査では、学校が児童・生徒のケアに気づいたきっかけとして最も多かったのは「教員が気づいた」（45.8%）で、次に「本人からの相談」（33.3%）でした。また、地域の相談支援機関や、民生委員・児童委員を対象にした調査では、支援する際の課題として「家族や周囲の大人に子ども若者ケアラーという認識がない」「どう把握し、支えていけばよいかわからない」という回答も多く挙げられました。
地域でも少しずつ「ヤングケアラー」という言葉は広がってきましたが、まだまだ十分に認知されておらず、気づきや理解を増やす必要があります。

座談会に参加してくれた若者からは、「おせっかいな人が増えてほしい」という言葉がありました。声をかけてくれる誰かがいるだけで、気持ちが楽になることもあります。
また「自分という存在そのものを受け入れてもらえる」ことが、大きな力になるということもわかりました。見えにくい課題をとらえるために、時にはカテゴリーに分けることも必要です。しかし、それによって、大事なことを見落としてしまわないようにしなければなりません。
「自分にどんな力があるかわからない」との声もありました。育った環境によって子どもや若者の選択の機会が限られてしまう現状があります。だからこそ、どんな状況であっても若者が自分自身の人生を歩めるよう、挑戦する機会を持ったり、多くの選択肢から自ら選んだりできるようなサポートも必要です。

令和３年３月から動き出した「地域養護推進協議会」は、住まい、就労、生活、学ぶ機会を支え、子ども・若者の可能性をはぐくむ福祉的支援のネットワークです。こころとからだをサポートできる「気楽に安心して相談できる憩いの場」をさらに広げていけるよう、滋賀県社協では、市町社協や社会福祉法人等の福祉関係者、企業関係者、地域福祉の活動者の方々、そして未来をつくる子ども・若者たちとともに取り組みを行っていきます。

文部科学省ホームページ
「ヤングケアラーの実態に関する調査研究について」
https://bit.ly/yng-carer

**滋賀県地域養護推進協議会**
〈場所〉守山市守山6丁目10-68 マザーボード内
〈TEL〉077-582-2221
〈開所日時〉月～金曜日 9:00～17:00
〈事業内容〉アウトリーチを含めた個別支援／若者の居場所づくり／政策提言

「おめでとう」から「ありがとう」まで

# 縁 共生の場 探訪

「滋賀の縁」認証団体を訪ねて

## あったかほーむ　社会福祉法人あすなろ福祉会

空き家となっている古民家を改修し、子どもや若者、高齢者、障害者など、だれもが集い交流できるコミュニティハウスづくりが豊郷町で行われています。高齢化社会において、多世代がともに暮らす共生社会の実現をリードする試みで、新しい福祉のあり方を提案しています。

あったかほーむ「恭やん」に集う地域の人々

### 多世代交流で活気 地域の「縁側」づくり

豊郷町のコミュニティハウスづくりは、社会福祉法人「あすなろ福祉会」と、そしてNPO法人「とよさとまちづくり委員会」、滋賀県立大学の学生でつくる「とよさと快蔵プロジェクト」の三者が協働して始めました。滋賀県が進めるあったかたうんづくり事業の一環で、2007年から県や町の補助を受けて「おやえさん」「磯部邸」「恭やん」「おこうさん」などの「あったかほーむ」を次々につくり、発展させてきました。

あったかたうんづくり事業は、世代を超え、家族のような関係を保ちながら支え合う地域の「縁側」をつくっていく試みです。県内の他地域でも取り組まれてきましたが、豊郷町のあったかほーむはひと味違い、多世代交流の工夫があります。まず県立大学の学生が空き家改修に協力し、生まれ変わった古民家の2階に学生や卒業生が住んでいます。そして、その家賃をあったかほーむの運営費に充てているのです。この仕組みが、多世代交流でまちを活気づける好循環を生み出しています。

**「滋賀の縁」認証**　滋賀の縁創造実践センターがめざす「現行の制度で解決できない生活課題、地域の福祉課題に気付いた人たちが、実践者として、問題解決のために協働して具体的な取り組みをしている活動」を、滋賀の福祉実践モデルとして県、滋賀県社会福祉協議会（縁センター）の2者が認証するものです。2022年1月現在、74団体を認証、18団体を奨励しています。

### 1割が払えない人を家に1人にしない

高齢者のデイサービス事業などを展開しているあすなろ福祉会が、なぜコミュニティハウスの運営を始めたのでしょうか。

きっかけは、デイサービスを利用しない高齢者の「理由」にありました。「介護保険料の1割負担が払えない、という人たちがたくさんあったのです。そうして独居のお年寄りがずっと家にいるとどうなるか。当然認知症になる。これはあかん、と思いました」。これがあすなろ福祉会の浅居茂理事長のスタート当初の思いです。

浅居理事長が「なんとかしなければ」と考えていたところ、とよさとまちづくり委員会や県立大学の学生の古民家改修の取り組みを知りました。学生たちに住人になってもらい、あったかほーむのモデル事業としてスタートさせたのです。

「お金が払えない人を取り残さない」という思いから出発した古民家改修でしたが、第1号の「おやえさん」がオープンすると、学校帰りの小学生らが寄ってくるようになりました。「知ってるお年寄りがいるというので、遊びに来るんですね。そうしたら、集っている人たちも元気になっていきました」と浅居理事長。

あすなろ福祉会
浅居茂理事長

### 温かい人間関係に魅せられる若者たち

豊郷町雨降野地区の古民家「恭やん」では、週3回、ご近所のお年寄りたちが集い、和やかに話をしています。「恭やん」は、あすなろ福祉会などが2009年にオープンさせた3カ所目のあったかほーむです。

開放日に通ってくるお年寄りたちは、地域の住民。その中に混じって、若い女性が2人。「恭やん」に集う人たちとの温かい関係性に魅せられて2階に部屋を借りて暮らしています。お互いに世代は違いますが、畑の話や地域の話題で盛り上がります。

「何かをしなければいけないというメニューもなく、気楽に集える。ひとり暮らしの人も多いので、気分転換になります」。そう話すのは、「鍵当番」の赤塚紀久子さん。開放日に、鍵を開ける仕事を担っている8人のうちの1人です。利用者たちも、「家にいると1人だけど、ここに来ると地域のいろんな情報が聞けて楽しい」と、「恭やん」の魅力を語ります。

手芸やおしゃべりを楽しむ

REPORTER


## 田中 義高

厚生労働省 社会・援護局
福祉基盤課 福祉人材確保対策室
室長


# 霞が関レポート

滋賀の福祉の創造実践に深く関わってくださった厚生労働省の現役キャリアから、国の政策の動きや重要な視点についてレポートしていただきます。

昨年の秋から厚生労働省で介護・福祉人材確保対策に携わっています。この分野に関わるのは、滋賀県庁時代以来約10年ぶりですが、この間、現場の人材不足はさらに進行する一方、局面が大きく変わってきているとも感じています。

介護職員数は介護保険創設の2000年当時の55万人から2019年には210万人まで一貫して増加し続けており（年平均7.5万人増）、この10年間でも65万人増加しています。今後も毎年3～5万人程度の増加（2040年までに69万人増）が必要と推計されていますが、これまでの20年と大きく異なるのが、「高齢者の急増」から「現役世代の急減」への局面変化であり、働き手自体が急速に減少する中で介護・福祉の人手をこれまで以上に確保していかなければなりません。医療や他のサービス業でも人手不足が叫ばれる中、難易度は上がっていきます。

明るいニュースもあります。従来、介護現場は離職率が高いと言われてきましたが、2020年度介護労働実態調査によれば、介護労働者の1年間の離職率は14.9%と過去最低を更新し、全産業の平均離職率15.6%を0.7ポイント下回りました。働きやすい職場を作ってこられた介護関係者の努力の結果だと受け止めています。

国では介護・福祉人材の確保対策として「人材の裾野を広げ、長く続けられる」よう、「介護職員の処遇改善」「多様な人材の確保・育成」「離職防止・定着促進・生産性向上」「介護職の魅力向上」「外国人材の受入環境整備」など、総合的な対策を進めています。

処遇改善については2009年以降月額7.5万円の賃上げに相当する改善を行ってきたところ、今年度の経済対策でさらに月額9000円相当の上乗せを図ることになりました。他産業に追いつくためには、今後もさらなる改善が必要です。

多様な人材の確保については、参入のハードルを下げ、人材確保を支援する観点から、介護職の機能分化を図り、掃除、配膳、見守り等の周辺業務を担う介護助手の普及・マッチングのため、令和4年度新たに都道府県福祉人材センターへの介護助手等普及推進員の配置を進めます。

生産性向上については、10年前と比べるとICTや介護ロボットの活用が大きく進みつつあります。積極的なICT活用を図っている事業所では、先進的なICT活用自体が介護のイメージを変え、若い世代への採用のアピールポイントになっているそうです。

外国人材の受入れ割合は増加傾向にあり、8.6%の事業所で外国人材が活躍しています（前掲調査。2年前から6%増）。受入れ人数ベースでは技能実習生が41.3%、在留資格「介護」が21.3%、留学生が18.8%となっています。受入れを進めるかはそれぞれの事業所の経営判断ですが、「外国人職員の働く様子を見ることで、日本人職員の仕事に対する意識が高まった」など人材不足への対応以外の効果もあると聞きました。コロナ禍でほぼストップしてきた新規入国が通常どおりに戻れば、2019年に始まった特定技能制度の人材の増加も見込まれます。

### REPORTER 略歴

［田中義高］2000年京都大学卒業、厚生労働省入省。障害保健福祉部、保険局、大臣官房総務課、国会連絡室等を経て、2019年7月から日本年金機構 経営企画部 企画調整監。2021年9月より現職。米国ニューヨーク州弁護士。2010年から3年間、滋賀県庁に出向（健康福祉部障害者自立支援課長、健康福祉政策課長等）。

子ども食堂の様子

みんなで干し柿づくり

毎月子ども食堂も開かれ、子どもたちが母親らに見守られながら準備や後片付けもしてごはんの時間を楽しみます。また、中学生・高校生向けにも自習室として開放し、みんなに見守られながら勉強する子もいます。「恭やん」に集う親子も若者もお年寄りも、みんな地域の顔見知り。まるで大きな家族です。

## 高齢者の元気の源 後継者の育成が課題

豊郷町のあったかほーむの利用者アンケートでは、「行くところができてうれしい」「孫くらいの学生にご飯を食べさせることが生きがい」という感想も寄せられ、高齢者の元気の源になっています。また、子どもたちからも「手作りのおやつが食べられてうれしい」「昔の遊びを教えてもらえる」などの声があがります。「高齢者だけ集めるのではなく、年齢で分けずにだれでも利用できる場であることが大事」と浅居理事長は語ります。「子どもたちも、喜んでお手伝いをしてくれている」といい、成長の場にもなっています。

この画期的な試みは、大学教授や、福祉先進国であるノルウェー大使館からも注目されてきました。古民家という家庭的な場での交流が、他にはない取り組みだったからです。ただ、第1号の「おやえさん」が老朽化のため閉じてしまうなど、継続の難しさもあります。課題は、「高齢化社会にとって多世代交流は重要である」という認識を広めることと、後継者の育成です。

「独居のお年寄りも認知症患者も増えている現状で、あったかほーむの取り組みは、介護保険料の削減にもつながる。その効果をみんなが理解して、頑張ろうと思ってくれたら我々も頑張れる」と浅居理事長。地域の高齢化が進む中、次世代に広く「あったかほーむ」の役割を伝えるべく、活動を続けています。

お年寄りたちの渾身の作品や写真などが飾られている「恭やん」の展示コーナー

# 生きづらさを生きる

設立から73年目を迎えた歴史ある社会福祉法人滋賀県母子福祉のぞみ会。
昨年8月から新しく母子家庭向けの多機能型シェアハウス事業を始めました。
そこで見えてきたのは、困っているけれどだれにも助けを求められないお母さんの姿でした。

**坂下ふじ子さん（社会福祉法人滋賀県母子福祉のぞみ会常務理事）**

## 困難を抱える母子家庭の自立を支える社会への架け橋

**―母子家庭のための多機能型シェアハウス『のぞみ♡ハウス』**

### シェアハウスを始めて見えてきた課題

「思っていたよりもずっと問題は複雑で深刻だった」と、常務理事の坂下ふじ子さんは言います。母子家庭のためのシェアハウスを始めたきっかけは、2年前からのコロナ禍です。シングルマザーには非正規雇用の人が多いために収入が減り、解雇された人もありました。「家賃が払えない」という声をきいて、住宅支援、保育サービス、就労支援の3つの機能を備えた多機能型シェアハウスを開設したのです。「半年間やってみて、どんなことに困っておられるのか見えてきて、課題は山積み」と坂下さんは言います。「まさに生きづらさを生きる。課題が複雑で、みんな違い、本当に大変です」

市役所からの紹介やLINE相談、面談などをきっかけにシェアハウスの利用が始まります。LINEなどのSOSに丁寧に返すうちに信頼関係ができ、「お金がない」「失業した」「夫の暴力・暴言があるので逃げたい」「子どもが不登校」など、多岐にわたる具体的な悩みがわかってきて入居につながることもあるのです。

のぞみ会は、フードパントリーの活動を通じてひとり親家庭の食の支援も行なっています。こうした活動をきっかけにして相談につながったり、シェアハウス退去後のつながりを継続したりしています。

シェアハウスは、4世帯用と2世帯用の2ヶ所。のぞみ会のスタッフは約10人で、保育士や相談員、事務局職員などがいます。母子家庭で子どもを育てた経験のあるスタッフが相談にのり、助言します。研修を受けたピアサポーターも地域に30人ほどあり、入居者の様子を見に行ったり、時には宿泊したり、そして、のぞみ会にできないことは専門家につなぎます。大津市役所や児童相談所、不動産事業者、弁護士などと連携しています。

母子には3ヶ月をめどに入居してもらい、お母さん自身に自立支援計画をつくってもらいます。1ヶ月目は、安心して暮らす期間。2ヶ月目からは子育てのフォローをしてもらいながら保育園の手続き。3ヶ月目に、就労に向けて準備をします。20代の若い母親も多く、ハローワークに通ったり、資格を取得したり、正規職員をめざす人もいます。

### 精神的な苦しさ、困難の連鎖

「頼れる実家や親戚もなく、帰る場所がない。精神的に苦しみ、生死の瀬戸際まで追い詰められている方ばかり。お母さん自身が親に甘えたこともない。虐待を受けてきた方もあり、子どもの育て方がわからない。毎日カップラーメンを食べて育ち、食事を作れない人もいます。困難の連鎖が起こっています」。子どもに発達障害があり、躁鬱（そううつ）や暴力に悩まされても相談できる人もなく、1人で抱え込む人もあります。「お母さん自身が精神科に通院し、お子さんも毎月受診するような母子が必死に生きておられる。金銭的な支援があれば自立できるわけではないのです」

お母さんの寄り添いでまず大事なことは、事務的にならず、しんどい気持ちを受け止めることだと、坂下さんは言います。「心の内を話せる人が1人でもいるかどうかで違います」。わからないことは一緒に考え、答えが出なくても、毎日話を聞きます。10分でも20分でも顔を合わせて話すということを続けています。

### 一緒に整理をすることで自立へ

少し考えればすぐに解決できそうなことでも、なかなか対処できないお母さんたち。それはなぜでしょうか。「1人で抱えすぎると、一番解決しなければならない問題が何かわからず、整理できなくなるのです。ただ、一緒に具体策を考え、ちょっと支援をすると解決することもあります」。母子手当の申請ができていない人には、同行支援する。入居したくても子どもが転校するのが嫌なら「ここから通えばいい」と伝える。食事を作れない人と一緒に作ってみる。「いろんなことが、すごく大変に思える。その一つひとつを一緒にやっていく、ということなのだと思います」。お母さんは少しずつ変わっていきます。最初は目も合わさなかった人が、出る時にはニコッと笑って返答するようになる。子どもに対してネグレクト*だった母親が子どもに関心を示し、食事を作り、人生に希望を持つようになる。手に職をつけ、「前向きになれて生活も再編できた」「ここにきてよかった」という言葉が出ることもあります。

シェアハウスを出てからも、支援は続きます。「困ったときに連絡してくる人は生きる力、求める力がある人。逆に連絡のない人は頼る力がなく、支援制度を利用できないので、アウトリーチは欠かせません」。制度をつくるだけでなく、そこにつなげるサポート、そして自分から誰かを頼る力をつけて自立してもらえるようなサポートが必要だと、坂下さんは感じています。

*ネグレクト：育児や子どもの世話をしない状況を指す。子どもへの虐待のひとつとされる。

**滋賀県母子福祉のぞみ会**

ひとり親家庭のみなさんの悩みや困りごとなど様々なご相談に対し、専門の相談員がアドバイスやサポートをします。ひとりで悩まず、どんなことでも気軽にご相談ください。

TEL 077-522-2951

LINEやZoomでのオンライン相談も実施。詳細はのぞみ会のホームページで。

https://nozomi-kai.com/

# えにし雑感
Enishi Zakkan

ふとした瞬間に感じる「ひたすらなるつながり」。
福祉の現場だけでなく日常生活の中で感じたつながりを
4人の方に私的な視点で文章に綴っていただきました。

## 元気なシニアがつながりを求めて

レイカディア大学の運営や在校生の学生生活を支援するサポート隊の有志が集まって、２０１６年８月地域社会に貢献することを目的とした任意団体「レイカディアえにしの会」が発足しました。

設立当初はどんな活動ができるのか模索しながら、できることから始め、翌年「子ども食堂全国交流会 inしが」に参加して行った制作体験等をきっかけに、様々な出前公演を子ども食堂、保育園、福祉施設等で実施してきました。２０１８年 10月にＮＰＯ法人になり、より一層地域に貢献する団体として、基盤を強化しました。

また、毎年開催される子ども食堂フェスタでもコーナーを受け持って毎年参加している他に、企業や地域から子ども食堂等への寄付物品の仕分けや配布作業なども県社協より請け負っています。環境に関する活動として竹林整備作業にも関わり、整備を行っています。

私たち全員がシニアですが、皆様に喜んでいただくことで地域に貢献できる喜びと元気をいただきながら、人生 100歳時代、いつまでも元気で過ごせるよう、ひたすらなるつながりを求めて、活動してまいります。ご用命がありましたら、メール等でお知らせください。（野洲市／野川 篤美）

✉reica.enishi@gmail.com

HPはこちらから

## つながること・つなげること

私は障害福祉の仕事に就いて約30年になります。この間、職員や関係機関など様々な方とお出会いし、つながってきました。とりわけ芸術文化の分野で活躍されている方々との出会いやつながりは、障害福祉をまた違った側面から考えさせられる瞬間でもありました。

私は日頃から、まずは自分自身が人や物事とつながる。そして、障害のある人たちと人や物事をつなげていくお手伝いをすることがこの仕事で一番大切なことだと思っています。

というのも、私は他府県から滋賀に移ってきました。当初は周りに知り合いもいない状況で市民生活を送っていました。子どもが生まれ、その子どもが地域のスポーツ少年団に入団したことをきっかけに、地域の人たちとの出会いがあり、つながり、そして初めてこの地域の市民として生活をしている実感をもらいました。

人は誰かと、何かとつながっていることを実感することで元気になれるんだなと信じています。

（甲賀市／山之内 洋）



・・・・・・・・・・「えにし雑感」では、みなさまからのご寄稿を随時募集しています！・・・・・・・・・・

［応募方法／応募先］以下の原稿をWord形式でEメールにて事務局（enishi@shigashakyo.jp）までご応募ください。
◆タイトル20字程度＋本文400字程度（寄稿者のお名前とお住まいの市町を掲載させていただきます）
◆次のいずれかのテーマでご寄稿ください。　①「ひたすらなるつながり」と私
②滋賀の福祉に携わる（活動する／働く）喜び
③滋賀の福祉に携わる（活動する／働く）仲間へのメッセージ

## 繋がりが作る心の居場所

私は、10代の子どもたちが無料で過ごせる子ども食堂&居場所『やんちゃ寺』を開催しています。職業としては臨床心理士として行政に勤めてきた中で、公的機関における支援だけでは予防や再発防止の面での不十分さを感じ、民間資源として「どんなときでも行ける、家でも学校でもない第三の居場所」を始めました。

最初は子どもが集まらず、スタッフで膝を突き合わせてどうしたら来てくれるか悩む日々。でも開催から3年が経った今では、場所をお借りしているお寺に子どもたちの笑い声が響いています。

活動を続ける中で、本当の「居場所」とは、物理的な「場」のことではなく「人間関係」だと感じています。

『やんちゃ寺』は子どもの安全感を守るため開催当日の見学や参加はして頂けませんが、アルミ缶のゴミや物品寄付など様々な形でご協力頂けます。子どもたちが「一人ではない」と感じられる繋がりを、『やんちゃ寺』から増やしていければ、これ以上嬉しいことはありません。

（草津市／佐藤 すみれ）

※『やんちゃ寺』へのお問合わせはウェブフォームからのみ受け付けております。
https://form.run/@yanchadera

HPはこちらから

## 自ら動く

娘が成人式に出席するため会場まで送る車の中、生まれてから今日までの彼女を振り返ると数えきれないくらいの多くの方の支えがあったと改めて感じる。

彼女が生まれた年に私も福祉の職場に転職をし、それから20年以上の年月をこの世界で過ごしてきた。

入社後に最初に経験したデイケアの送迎で、利用者さんから地域の歴史や文化などを教えて頂いた。話を聞かせて下さるだけでなく、古い新聞記事なども持って来て下さることもあった。そのお陰で利用者さんや同僚と話す機会も増え、その話題も多くなった。

又、私の住んでいる地域のことも話すようになり、文化や習慣の違いなども分かるようになった。そこから少しずつ地域にも興味を持つようになり、趣味の活動もこの地域ですることとした。そうすると職場以外の地域の方とのつながりも増えていった。

やはり『つながり』とは自分から動くことも非常に大事だと改めて思う。そして自分から動くことでまた新たなつながりがどこかで生まれくれるのであれば、尚うれしいと思う。

（湖南市／谷 智之）

# 県社協レポート

滋賀県社会福祉協議会では
「ひたすらなるつながり」の理念のもと、
福祉関係者や地域のみなさんとともに、
さまざまな事業を実施しています。
このコーナーでは本会の取り組みや
職員の思いを紹介します。

（レポーター：縁企画・改革グループ 細川貴代）

左から滋賀県福祉用具センターの谷佳代参事、中原孝志副主幹、深町ルミ相談員

## 滋賀県福祉用具センター

# 「抱え上げない介護」を広げたい

本会では、介護の仕事に就く人の定着やケアを受ける人の負担軽減に向け、「抱え上げない介護」の普及を進めています。滋賀県福祉用具センターは、2019年度から事業所向けの研修を始め、2021年度から「抱え上げない介護推進事業所推奨事業」をスタート。2022年1月に初めての「抱え上げない介護推進事業所」が2ヵ所、誕生しました。

「抱え上げない介護」とは、福祉用具の活用や身体の使い方の工夫をすることで、介護する人と受ける人の双方に負担がかからない介護です。たとえば、これまでは自分で立って車いすに移れない人には、介護者が前から抱え上げて介助をしていました。抱え上げない介護では、リフトやスライディングボードといった福祉用具を使って移乗します。

このように介護や医療・福祉の現場では、介助者が力を使って抱え上げたり支えたりする場面が多くあります。しかし、力を使う介護は腰痛をもたらすなど身体への負担が大きく、介護される人にとっても骨折や床ずれなどの原因となります。厚生労働省は2013年に「人力での抱え上げは原則行わせない」との指針を出しましたが、進んでいませんでした。

本会でも「抱え上げない介護」のために福祉用具の使い方研修会を開いてきましたが、個人での参加のため、現場での定着が進みませんでした。そこで、2019年度からは「職場全体で抱え上げない介護に取り組む体制づくりを進める」という方針に転換。研修会には「職場」単位での参加を求めてきました。

事業を進めてきた滋賀県福祉用具センターの谷佳代参事は、「体力的に負担の多い介護は、働き手確保の上でも大きな課題となっています。抱え上げない介護に取り組む事業所は、安全で健康に働ける職場。取り組みは人材確保と定着にもつながります」と話します。

実践から変化も生まれています。推進事業所からは「抱え上げない介護を始めてから、利用者の床ずれや傷がほぼなくなった」「職員の腰痛も減り、ケア全体に余裕ができた」などの報告が寄せられています。谷参事は「抱え上げない介護は、利用者、介護者、事業者や地域に良い効果をもたらす、まさに三方よし。取り組みが広がれば、どんな状況でも健やかに過ごすことができる地域が増えます。抱え上げない介護があたりまえとなるよう広めたいです」と話しています。

リフトなどの福祉用具を使った移乗は
介護者だけでなく利用者の負担も軽減します



# Recomended Movies & Books
# おすすめの映画と本

## MOVIE 最強のふたり

<あらすじ>
**パラグライダー事故で頸椎を損傷し、日常生活のほとんどを介護に頼る大富豪のフィリップは、自らの介護士の面接を受けに来たドリスと出会います。介護経験がなく、自分に一切同情の目を向けず、遠慮せず言いたいことを言うドリスに興味を持ったフィリップは、彼を雇うことにしますが…。**

障害のある孤独な富豪と貧しい青年の実話から生まれた物語です。繊細なフィリップに毎日24時間つきっきりで介護をすることになったドリスは、食事や入浴、外出などすべてにおいて大胆かつユーモアだらけで、周りをヒヤヒヤさせます。しかし、ずっと周囲からの腫れもの扱いにうんざりしていたフィリップには次第に笑顔が増えていき、2人は心の交流を深めていきます。
首から下の感覚が全くない車椅子生活のフィリップを「障害のある人」という枠にはめず、どんなときも1人の人間として対等に向き合うドリスの存在が、フィリップの毎日を色あざやかに染めあげていきます。人はどのような境遇にあっても、向き合ってくれる人が1人でもいれば人生は豊かなものになる。自身の対話力について、改めて考えさせられる作品です。

DVD 好評発売中！¥1,257-（税込）発売・販売元：ギャガ
©2011 SPLENDIDO/GAUMONT/
TF1 FILMS PRODUCTION/TEN FILMS/CHAOCORP

## BOOK 生きるぼくら

著者：原田マハ ／ 出版社：徳間文庫

<あらすじ>
**いじめからひきこもりとなった麻生人生。24歳のある日、頼りの母が突然いなくなります。残された年賀状の束に大好きだったマーサばあちゃんの名前を見つけ、人生は祖母に会うため4年ぶりに外へ。人のぬくもりにふれ、米づくりを通して、人生が大きく変わります。**

離婚、ひきこもり、認知症など、重いテーマが散りばめられていますが、重くなりすぎず描かれています。年賀状をきっかけに始まったマーサばあちゃんと人生、もう1人の孫のつぼみとの3人の生活の中で、自分一人では生きる力を失っていた主人公たちは、厳しくも温かい蓼科の人々に見守られ、支えられながら、祖母の介護と米づくりを通して、人とのつながりや生きる力を取り戻していきます。読後には、生きることに前向きな気持ちになれる、そしておにぎりが食べたくなる1冊です。

## BOOK 3月のライオン

著者：羽海野チカ ／ 出版社：白泉社

<あらすじ>
**幼い頃に交通事故で家族を亡くした桐山零。父親の友人だった棋士のもとで育てられ、中学生でプロ棋士となります。やがて、その家も出て孤独な日々を過ごしていましたが、祖父と3姉妹で暮らす川本家との出会いをきっかけに零の世界は広がっていきます。**

厳しい勝負の世界を描きつつも、人の温かさが感じられる将棋がテーマの作品です。人と関わるのが苦手で殻にこもりがちな零でしたが、川本家との出会いをきっかけに自分の居場所を見つけていきます。周りを頼ること、そして周りから頼られることを経験する中で、自分の気持ちや感情と向き合いながら、空回りしつつも“誰かのために”と考えたり、動いたりする姿に読み手も背中を押されます。人と人とのつながりがとても優しく描かれ、日々の出会いを大切にしたいと改めて感じさせてくれます。

くらしつなぐ
ひとをつなぐ
ちいきつなぐ

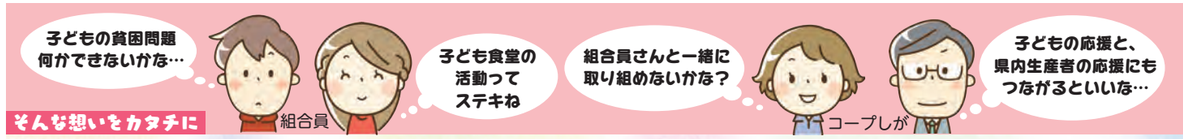
## 滋賀県老人福祉施設協議会は

特別養護老人ホームなど、高齢者施設等を経営する
滋賀県内101の事業所により組織しています。
会員は高齢者施設の運営に加え、滋賀県内各地域の活性化や地域づくりに
住民のみなさまと共に取り組んできました。
新型コロナウィルス感染症の急激な感染拡大と
暮らしへの影響が長期化する中、健康や暮らしに関して
誰もが先の見通せない不安や悩みを抱えています。

滋賀県老人福祉施設協議会は、
重い責任と緊張感に日々向き合いながら、
みなさまの暮らしが途切れないように、そして孤独に陥らないように、
介護サービスを安定的に提供し、
ひとりひとりの暮らしを支えていきます。

事務局
〒525-0072
滋賀県草津市笠山7丁目8-138 県立長寿社会福祉センター内
滋賀県老人福祉施設協議会
TEL.077-585-9380　FAX.077-585-9381
Email shiroukyo@shiga-roushikyo.jp　http://www.shiga-roushikyo.jp/






# コープしが
# しが子どもの笑顔はぐくみサポート基金

**コープしがでは、貧困や様々な悩みを抱える子どもたちが“笑顔”で暮らせるよう組合員がお買い物で応援できる基金を設立しました。**

### ●基金の設立目的

1）商品の利用を通じて組合員さんと一緒に、貧困や様々な悩みを抱える子どもたちを応援します。
2）県内商品の利用を基金に繋げることで、県内生産者の応援と地産地消につなげます。

## 基金の仕組み

**組合員さんの対象商品の利用に応じて、基金に積み立てます。**

**●宅配の対象商品**
コープしがマルシェの
**2～5ページ**
（もっとこだわりSHIGA・SHIGA市場）**掲載の商品**

**コープしが**
対象商品
ご利用1点につき
**1円を基金に**
**積み立てします。**

**●お店の対象商品**
**地場産農産物**コーナーの**県内産農産物**

県内生産者の応援にもつながります！

## 積み立てた基金は？？？

**年に1度、滋賀県社会福祉協議会がすすめる「子どもの笑顔はぐくみプロジェクト」に寄付します。**

## さらに！

**物流センターで在庫として確保している商品を毎月1回、同プロジェクトに寄付する取り組みも始めています。**

詳しくはこちら

生活協同組合コープしが

# 暮らしの中の身近なところで、社会福祉法人は活動しています

社会福祉法人は、介護、保育、障害者福祉の各サービスに加え、地域にあるさまざまな生活課題に視野を広げ、人びとが必要とする支援や活動を展開しています。県下の各圏域でも住民の暮らしを支える中心的な役割を担っています。また、近年各地で多発している災害被災地でも、被災者に寄り添い、避難生活や日常生活へ戻る際の様々な支援を粘り強く続けています。社会の中で、誰一人取り残さないことが私たちの願いです。

みんなの「生きる」を
社会福祉法人

**社会福祉法人経営者協議会(けいえいきょう)とは**

社会福祉法人経営者協議会は、福祉施設を経営する法人により、福祉施設の機能充実等を目的として、1981 年に全国社会福祉協議会の内部組織として設立された団体です。各都道府県の経営者協議会(都道府県経営協)をもって構成し、現在全国で約 7,800 の法人が加入しています(全国社会福祉法人経営者協議会)。滋賀県経営協は、現在 94 の社会福祉法人で構成し、県民の身近なところで福祉活動やまちづくり、地域のセーフティネットとして中心的な役割を担っています。

【滋賀県社会福祉法人経営者協議会　事務局】
滋賀の縁創造実践センター
社会福祉法人滋賀県社会福祉協議会
〒525-0072　滋賀県草津市笠山 7 丁目 8-138
TEL 077-567-3924　FAX 077-567-5160



滋賀の縁創造実践センター
（滋賀県社会福祉協議会）

# 縁特別会員 ご入会のお願い

## 滋賀の福祉の充実をめざして

滋賀に暮らすだれもが「おめでとう」と誕生を祝福され「ありがとう」と看取られる地域社会をつくるという滋賀の縁創造実践センターの理念の具体化のため、滋賀県社会福祉協議会は平成31年に定款変更を行い、制度のはざまの支援・制度の充実をめざし引き続き取り組んでいます。

縁特別会員制度は、滋賀の縁創造実践センターの実践を支える会員制度です。民間福祉の実践者のみなさま、また「持続可能な開発目標(SDGs)*」に共感する企業や団体のみなさま、縁特別会員に加入賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

*持続可能な開発目標(SDGs)には、「我々はこの共同の旅路に乗り出すにあたり、だれ一人取り残さないことを誓う」という理念が掲げられています。

## みなさまの会費は、現在これらの事業に使わせていただいています

えにし共生の場づくり、制度のはざまへの支援、生きづらさを抱えた人と地域の架け橋づくり―共生社会への営みを「縁架け橋」と名付け必要な事業を企画・実施していきます。

**地域食堂としての子ども食堂づくり**

▲子ども食堂の食事風景

**ひきこもりの人と家族の支援**

▲はたらく体験での作業風景

**社会福祉施設等を活用した子どもの夜の居場所フリースペース推進**

▲フリースペースで遊ぶ子どもとボランティアの方

**社会的養護のもとで育つ若者と社会の架け橋づくり**

▲仕事体験PARKに参加する子ども

**医療的ケアの必要な重度障害児・者の入浴支援**

▲「共生型サービス」普及のための研修会(オンライン)にて実践報告

**滋賀県保育協議会との共働事業**

**【待っている人たちがいる！】** 制度のはざまへの取り組み、縁共生の居場所づくり

### 会員の種類と年会費

**会員数：120会員**(2022年1月末現在)

団体会員…1口 5万円
社会福祉法人会員…1口 5万円
企業会員…1口 5万円／個人会員…1口 3千円

※特別会員のみなさまを対象とした研修会や事業も実施してまいります。

### お申込み・お問い合わせ

**社会福祉法人 滋賀県社会福祉協議会 総務グループ**
TEL **077-567-3920**　FAX **077-567-3923**
〒525-0072 滋賀県草津市笠山7丁目8-138
（県立長寿社会福祉センター内）
**http://www.shigashakyo.jp/**